



軍事教練における「行軍」(上)と「刺突訓練」(左)。(いずれも昭和12年3月卒・中36回「卒業アルバム」より転載)

土浦中学の学校教練 1 ～教練～

土浦中学での教科に教練がありました。教練教科書では教練の目的を「教練科は生徒に軍事的基礎訓練を施し至誠尽忠の精神を涵養するを根本として心身一体の実践鍛錬を行ひ以て其の資質を向上し国防能力の増進に資するを要旨とす」と規定しています。教練の内容には、校内での教練、行軍、発火演習(野外教練)、兵営宿泊訓練、査閲などがありました。文中の【 】内は筆者による注記です。

校内での教練

土浦中学でも1897(明治30)年の開校当初から兵式体操(1911・明治44年から「教練」と改称された)が導入されましたが、本格的軍事訓練は1899(明治32)年12月に立田新校舎(現土浦二高)に移転してから始まったようです。

体操伝習所で教習を受けた退役陸軍歩兵下士官が兵式体操及び体操の教員として教練を担当していましたが、1925(大正14)年からは配属された陸軍現役将校【原則として大尉以上大佐まで、本校には中野正太陸軍歩兵大尉が同年4月24日に配属されました】も教練を担当することになりました。以後、教練は毎週2時間の必修科目となり、軍人勅諭の奉唱暗記、不動の姿勢、挙手敬礼、ゲートル巻き、行軍、木銃を握つての匍匐前進、射撃訓練、銃剣による刺突訓練(小銃の先に銃剣をつけて藁人形を突く練習)、手榴弾投げ、斥候、飯盒炊飯、様々な訓練を総合した部隊訓練などで、軍事訓練そのものでした。1、2年次には個々の進退動作が、3年次に入ると射撃訓練が行われ、4、5年次には部隊訓練を中心としたものになりました。現在のテニスコート付近には銃器庫があつて、三八式などの歩兵銃(注)や背囊(はのし・水筒も備えてあり、それらを身に着けて教練が行われる時もありました。また銃器庫では、小銃の分解掃除なども練習させられ、限られた時間内に完了するように命じられました。

上級生の教練を見学した1年生の飯田庄左衛門(中39回)は、その模様を『進修第39号』(1936・昭和11年2月20日発

行)に「戦闘教練」と題して、次のように記しています。

「『ドンドン』等小銃のうつ音がひびいて来た。白帯を帽子に巻いた白軍は東土手の方から、黒軍は西の方から攻めはじめた【当時校庭の周囲は土手になつていました】。

白軍の長官は【配属将校の】富澤【臻】先生、黒軍の長官は【教練科の】山崎【利市】先生である。白軍の方では機關銃を土手に備へ付けて『タタ、タタ、』と打ちだしてゐる。さながら兵隊の演習と同じやうでそれを見てゐるやうな氣持がした。すると【真鍋小学校脇の】鹿島神社の方から山崎先生が黒軍の一隊七八人位を引率してとび出し小銃を『ドンドンドンドン』と打ちだした。白軍も之に應戦して小銃や機關銃を『ドンドン』とうつつてゐる。兩軍とも少しづつジリジリとせまつて来た。だんだんと間隔が狭くなつてくる。三十米、二十五米、二十米、はては十二三米となつた。すると黒軍の方で『ヤアー』とときの聲をあげて突進した。白軍も之に應へて突進して来た。あわや肉弾戦がこゝに展開されようとしたとき白軍の方からラツパの音が響き出した。『タツタタツタタツタツタツター』このラツパの音が聞えなくなるころ戦闘教練は終つた。

次に分列式が行はれた。軍旗の代りに校旗。校旗は四五人の、軍隊でいへば護衛兵のやうな人にあたる者に守られてしづしづとあるき出した。ついで甲、乙、丙組の順序で足並をそろへてあるき出した。その有様はともいさましかつた。『きをつけーッ前へ進メ』といふ號令はそらにこだましてひびきわたつた。」

教練は小学校にはない科目で、空包(空弾からだま)とはいへ小銃や機關銃を撃つての訓練で、兵隊と遜色のない上級生たちの演習は、1年生にとっては大きな驚きでした。

行軍

行軍とは軍隊が隊列を組んで長距離を行進・移動すること、学校教練でもしばしば行われました。土浦中学でも全校行軍は毎年5月の恒例行事となつていました。目的地は藤澤村(現土浦市藤沢)の八坂神社や阿見の霞ヶ浦海軍航空隊などでしたが、筑波登山の時には学校から北条の街を経て神郡の集落までは行軍が行われ、そこからは個々に山頂を目指しました【帰路には筑波線を利用しています】。1年生の林秀春(中43回)は『進修第43号』(1940・昭和15年3月1日発行)に「全校行軍」と題して次のように書いています。

『ざくざくざく。』と靴音も勇ましく、我等土中健男兒は、今校門を出たのである。今日は行軍である。五月とはいへもう高くなつた太陽は、容赦なく我等の頭上に、そ、ぎかけてゐる。

行程も大分過ぎて、小松で休んでから大分たつ。今は【霞ヶ浦海軍】航空隊のあたりを歩いてゐるのである。皆は、始めの元氣はどこへやら悲鳴をあげる者が大分出来て来た。航空隊はどこまで行つても續いてゐる。廣場の一角には、格納庫が仁王の如く聳えてゐた。やうやう『辨當を食べてよい』の令が出た。僕等は待ちに待つた號令なので、喊聲を上げて近くの山の中、航空隊の廣場などでが

つがつくひ始めた。

又苦しい行軍を續けて、荒川沖に着いた時は零時半頃であつた。誰もが今までの疲労はどこへやら、敵城を占領した様な氣持になつてゐた。歸りは尚辛い行軍であつた。足は棒の様になるし、又自動車を通ると、砂ほこりが霧の様立ちこめる中を歩かねばならぬ時が時々あつた。皆は疲れた疲れたと言ひながら、埃で眞黒になつた鼻をこするので、顔中眞黒になりながら汗をふきふき、歩くのであつた。

やがて校門が見えた時は、非常に嬉しかった。と同時に緊張した心がゆるんで、疲が一時に出了た。

後で落伍せずに無事に歩けた事を嬉しく思つた。」

この5月の行軍は、新入生にとつて最初の試練であつたようですが、中35回の飯島節郎は1年生の時に「明日の行軍まつや僕達の心はおどるねつかれぬかな」(『進修第35号』1932・昭和7年4月30日発行)と、初めての行軍への期待感を詠んでいます。更に5年生の鶴田兵太夫(中31回)は同号で「武装して足どり軽く校門を出で、行く日も憶ひ出のたね」と詠んでおり、5年間の鍛錬の成果が窺われます。

冬季、雪の積もつた時には「授業の豫定を急遽全校臨時雪中行軍を舉行する旨達せられたり、一同健兒の拮躍歡聲は各教室に湧き意氣軒昂、すでに萬里の外に馳騁【馳騁】の誤植か】するの概あり」(『進修第10号』1907・明治40年4月10日発行)とのことで、全生徒が喜び勇んで水戸街道を北進し中貫を経て稻吉村(現かすみがうら市稻吉)まで行軍し、そこ

で各学年入り乱れて大雪合戦に興じました。帰路は中貫から個人・団体学年対抗600m競走を行い、翌日校長訓話の後、優勝者に賞品が授与されています。

修学旅行は5年生を対象として約1週間の日程で主に関西方面で行われましたが、鉄道などの交通機関を利用したのは都市間の移動の時だけで、目的地及びその周辺ではこれまた長距離を歩くという行軍が行われていました。当時は旅行者などではなく、旅館との交渉や鉄道の手配など一切を教師がやらなければならず、血氣盛んな若者を1週間も管理する気苦労(他校生とのトラブルがしばしば起こっていました)に加えての強行軍で、先生方は修学旅行に行つて来ると1貫目(約4kg)は痩せると言われていました。修学旅行は1912(昭和17)年を最後に、戦後も復活しませんでした。この辺にその真相があつたようです。

発火演習(野外教練)

発火演習は実戦の状況を想定して行われた軍事訓練で、主に4年生・5年生を対象とし、原則として学年単位で行われましたが、時には複数の学年が合同で実施することもありました。1学年を2隊に分け、配属将校や教練科の教師が立てた戦略に基づいて対戦が行われました。空包とはいえ、硝煙が立ち、ズドンと大きな音が鳴り響いて、生徒たちにとっては緊張を強いられる訓練になっていました。

中35回の菊田哲(当時3年生)はその息詰まる体験を、『進修第37号』(1934・昭和9年3月9日発行)に「斥候」と題して次のように記しています。

「(略)自分達は第四斥候だ。四つの斥候が出されるのである。

主力よりも先に自分達は出發した。斥候長より色々の注意を與へられた。自分等三人の中誰も白鳥邊へ来た事が無いので途中迄一緒に居た他の斥候に道を教はりながら道が三叉になつた處で分れた。

急に心細くなつた様でもあり兪々(い)い此れからだと思ふと、俄(む)に緊張して来た様でもあつた。

木の茂つた道を三人は黙つて進んだ。何だか幼い頃の憧であつた兵士に自分もなつた様な氣持だ。ふとそれを考へてひとりでも面白く思はれた。

『居たつ』此一言で自分等二人は急に止つた。どきつとして『伏せ』をした。そして這ひながら松の木迄進んだ。太い松の木に隠れて友の指差す方を見ると、遠く五、六名の、頭に白布を巻いた敵兵が松林の中に駆入つた。

斥候長は地圖と紙を出し、ペンで本隊に報告すべき事を書いた。その報告の任に當つた僕は、靴ずれの痛みも忘れて駆けに駆けた。

途中迄来ると『ガサガサ』雑木を分けて自分の方へ進んで来る者があるのでふと見ると頭に白布がある。はつと思つて『バタバタ』駆けて来たのを急に立止り夢中で腹這ひになつた。

心臓の動悸が高まつて来た。敵は五、六名だ。先刻の敵兵に違ひない、と思つて居る中にも敵兵は自分の方へ向つて来る。もう五、六間位しか離れて居らぬ。ぐずぐずして居たら見つかるに定つて居る。而かも此方に勝目は無い。もう仕方が無いと思つて駆出した。敵の様子等

を見て居る違(い)まは無かつたが敵も驚いたに違ひない。三十米位敵と離れた時『バーン』と銃の音がした。自分は打たれたのかな?と思ひながらも夢中で雑木林へ駆込んだ。敵は追つて来ない。道に出たら向ふから一小隊位の部隊がやつて来るのが見えた。敵ではない。見馴れた顔がある。嬉しくなつた。然し餘り駆けつけて来たので物が言へない。ハハハ息をつきながら、それでもやつと尋ねて見ると主力がまだ後の方に居るとの事であつたので、中隊長の許に行くべく再び駆けで行つた。後を一寸見たら敵の頭が林の中からのぞいて居た。」(1925(大正14)年に配属將校が着任すると、発火演習は「野外教練」と呼ばれるようになり、その回数(年を追うごとに多くなつていきました。1932(昭和7)年までは年2回から8回程度だつたものが、1933年には12回、翌1934年には18回行われています。)

※第1回発火演習は1900(明治33)年1月12日、4年生(中1回、5年生はまだいません)を白軍、黒軍の2隊に分け、白軍3小隊を渥美政徳教官が、黒軍3小隊を上原重夫教官が指揮して、木田余付近で行われました。その後の演習場は近辺の木田余、手野、高津、遠方では谷田部、藤澤、石岡方面などでした。なお、発火演習については本紙第15号(平成21年7月16日発行)に詳細が記載されています。

(注)三八式小銃

明治38年に日本陸海軍の制式軍用銃として開発された歩兵銃及び騎兵銃。口径5.6mmの五連発で、歩兵銃は全長128cm、銃身長79.7cm、重量9.5kg、射程3km、騎兵銃は全長97cm、銃身長78.8cm、重量4.3kg、である。昭和14年に九九式小銃が制定されたが、太平洋戦争終結までの四十年間、日本軍の代表的な小銃であつた。